たゝりの鬼

壹

13
1718
1

門へ 13
猫 1718

自序

世俗所謂為鬼者畫圖偶像以傳焉。其形甚異而非人物之所能似。而曰以惱人為事也。余意者陰陽相和作體者為人為物。則人不怪失體而以變聚之者為鬼為厲。則世皆寒心。有其為鬼為厲者。則有已而後有之。故吾朝之世俗。正為神邪為鬼古人之說與是異。說鬼也由死而謂焉。說

神也由生而謂焉。然正恒也邪變也。由變者困苦。由恒者安靜。以按豈死心之獨為鬼生心之獨為神邪。生心亦由變而困苦者。乃謂之鬼之所為亦宜哉。然且愚者不識其所邪正之由來。此故或恨人或咎天以加自窮偶雖有謂知邪正之所由來以辨別之者。或謂之天或謂之妙而已矣。謂天是非之始謂妙是非之始。何為全盡言。

夫此未真知。恐能知之者少焉。知者不敢言。言者不敢知。真知止其所不知也。至矣哉至矣哉誰其企及。惟為已不知而順于天道者正也人也。至真知而用私知者邪也鬼也。當時邪智之人多有之。以為論道害道。以為論天北天。乃非私知之害而何也。唯真智如不知而能與天道相似矣故余不狗諸經不取諸論直加一層眼觀

上天以茫然。則有苟得于心矣。然只難言。
獨笑而不知牛足之舞踏之嗟々不勝讃
彼難言者喪我以吐戲言名之心鬼者則
悲彼之鬼心之意乎。或以請鑊之梓曰。
是亦蛇蚹蜩翼耳。何知其可不可耶。不敢
之防云爾安永六丁酉歲二月。甲陽東郡
山梨子隱者。獨明泝子。一何齊鈍通叙

心乃鬼也目録

一 まこと人間万物造物と対体こと事
一 人間と万物と体を弁ずる事
一 武こと道
一 為動為静不為動静こと事
一 純々たる生為に礼法を設事
一 程々敬言ゆ事
一 求犯と人設法こと事
一 大黄犯軍仏法を経下にする事

一石臼先生大黄の毒を制する事
一樟松を煎て六氣を清る事
一石臼先生鄭と高を平均して祝事
一燈石火法義雖回をうける事

四之巻

一石臼先生義方の雖回をあらに説給事
一茅抱方勢拙し事
一禪代茅仏の事

五之巻

一日天より毒屋茅氣に充た異見し事
一天の教方を仰くたぶり養を受る事

目録畢

心之鬼第一

萬國の人間茅國に造物と對決の事

天八方にして四時行われ日月代巡て労まる佐陽和順して齊しく茅物を育まるる父母の子を恵む如く別て愛るの心一人八方に至りて別て恵るの心なれよ茅若八方茅茅人の恵を恵るの事しく廻りて天を損ふるのあり小くも天を拾ふるのあれ人を恵人を恵人を泥して恵しむる者八鬼こそ其鬼こそ人のもなか未清須子より生じ別生し一株ちれバ華も茅く自も茅れく遠貫の為り長く茅恵を継茅し人の泥しく茅恵を責む茅法より武陽の南方に行医あり

性酒を好むゆゑに療治もおこたりて
うちハ苦るとて稱しく動うに病重まりて居をるに自慢
味しよ酒を飲て帯を延ふ達られ第二後よ灸を据られ
て漸く苦痛もとゞこほり門の外面のふこふ跡作さまのうる新
ふ向こ形あ儀よ大屋之今ひ抱抱をるの度くなれど
内儀赤ふ怖られ外病赤ふ深もれうは沢の正し
うゝぞる透を欲ひ多色の鬼ゑ沢ふ変じて乃おを
苦しむる或時ハ日償偿のなふじゝ皮肉ふ分入くを要武百
二十六地獄を現ふ見しらせ大屋ふ託して底借を責
時ハ東ゝ安物如火宅と二句の文よ二季の苦を見せし究
貸屋のよ代ふ赤稲門くハ金剛王剣の利剣の利を彼

げ衣紋乃掏とふ底付立面大立面ふ苦しゝを拵屋ふ託して
八火車百赤を乗を乗屋ふ託て俄乃へ誘ひ或時を
巻ふ化数ふ化又或時ハ蟲ふ化て上這して人中ふて恥辱
を与ふ見こゝを色赤心を操せしゝを八百万乃神等
鼻を擤目を閉て遠ざかりふ放のひ八百の鬼八者て勢
苦むるとゝいざ知ゝ廉治をれば世る仏人父育者
我を用ゝとして憤ゝ備ぬ貸屋を頻ゝ奴やと
奴ゝ赤ゝを恨儀赤を恨治ふ新兄弟とも中遠
して攪掇する人も寄れバ月日歴ゝるゝこハ協れ
ども我方ゝ起ゝ鞭ゝとゝ来れハ仏神を恨天を
恨む或日空腹を押て歓見して曰神も仏も

乃を初る人も那一陰徒あれども陽報まゝ〻天あれ
ゝと云小者まり唯酒ハ水ちれども米小代肉り稽
ゝりて辞ゝ又歌ゝ曰

なゝ〻小云ゝ那〻まバ酒壺のちゝふてもゝも
酒小しゝちんゝかゝつゝ孫ゝさゝバ毒の義をんゝく
心やんゝと物千乃核母ゝ小消沈し亞鉛の濃火探究十
牧六文の薬保ゝりも料理沈蒲堂一牧引ゝ〻ゝ〻ゝと
初療しゝが義ゝもゝ現ゝも笑ゝくぞへ門の戸を刻ゝる
母ゝ門ゝ乃ゝを〻ゝ起ゝを乃ゝ鶏ゝを出ゝく病人ゝも
ごゝるのゝ那裏ゝ〻体仕しやゝと就をゝれゝを大屋の
八ゝ米病人ゝゝゝやごゝゝぬ大半ゝ出米酒ゝゝ人間

ゝる若八今夜生れゝ端子でもゝ人を拾ひ出れ初而く
出孫ゝを〻ぬゝさゝのゝごゝれゝゝゝゝられ退ゝられ
て洗ゝく小人ゝをゝれゝ我町中の人実ゝゝ人も拾れ
去ゝ〻男女の別もゝ〻ゝ乞ゝいゝゝみゝ井泥し〻嘆ゝ路
けゝ捜ゝもゝゝ〻ゝ関乞勝ゝ〻ゝ現ゝ張ゝ数万の人に
押ゝれゝ〻地ゝ歩ゝもゝ〻ゝ〻ゝ宙ゝを切ゝゝお母ゝゝ
倭倭ゝゝて辞ゝ如ノ十町斗ゝ米ゝんゝと思ゝ時人ゝ
拾ゝ〻ゝ庭小ゝゝゝ乃ゝおゝも我初ゝ〻ゝ大地小ゝ然尾係
拘て傍ゝゝゝてゝゝゝしゝゝ俄低ゝて拘ゝを抜ゝゝゝゝ
め眉小無ゝ強ゝて怠的那ゝ素ゝんゝと独ゝ看れゝ我町内
のゝ人ゝのゝゝてゝゝバゝゝ皆一那ゝ小町ゝゝの名ゝ去ゝる

小幟を建て服せり既に武列江戸に出る中
幟ハ蕭颯として小風に靡きていとも江戸中の人
目ハ驚くばかりとぞ思へ大なるものと驚くなり
然れども江戸のごとくひしハ異なるなりたの方小日本
国と云ふ大幟大国を刺貫て編数百六十余列の
名を記しいろ中幟二十餘本ありて村々小幟小名を
書て幾万ともなく美小いとなきもの多し不行変しあて
ゑをされども兵衛さるる形を系ふりて口方月小おどろふ
陳ふ小ふもなく行もなく丘もなく林もなく系ぎすと
雲の倪相交ふ幾万方軍あるもんとも眼をうつても量
うとうとかく廣莫の不ま日なる国の人間を含合さて行乃

お場を立てて想ひ出るもなく西の方より二神の旗を
掛立清敵をなして幾位万とも数知れず那覇の人を
能くれを感決敵の人物くさてその次より天立の人間を
五天位を五ひふけ限を立しお集ふ又も次那覇ハ
山とお朱朝せ付人おして人そくのある新鮮人又と
次ハ琉球人乃一部くもおも
うなる大幟よりくの名を書ふて難題と云ふ難題と
初る或ハ交趾瓦良哈女真大寛咬嚕吧国小ものを蒙古
即くく批紫動ふ勾弼兼くい孫むり第ハ蒙古ふ勾
兼と知るもう名ふ引を輩国ハ皆も輩小く
ふりふり交脛国長人国長脚岩の人くハ海れても

来れ共其の出る用して美玉の人々を跨ぎ越く皆門
小さよ刻苦さて後退小殺来る八點正背小眼のあれ後
服玉乃一族之聖多黙治乃一族八今日と一世の時小祖地獄
の桟敷見復て腹て肩う張まんと見てくらもこいたぬ
斗りよ其美くだ見小美人で莫眈爾治の一者之同地獄
乃よ化と髀業まで小腹並べて聖多黙ぶた小座と日な
乃女莫眈爾をうて已ゲ弟を怕羞町人を聖多黙う地獄
の後と美りるかる中ま道路玉の人々八玉閻と云ひ
ゆうう多小寸分の衣裳と濃て主保うて其美ひ八
寒さふまうてくうりうれ寒小八懸渡治激濮治
蜆蠻治乃面くも皆そうれくの玉閻うてそもおら

脇くけ治小名小一頁ゆ女護治の女人うもと川つまて
来りしゲ脇人をゆる小法ね受氣一て在一ゆう
されども治うり独法玉帝江玉治良玉黒人玉押をく
等る在小見泥も法一日を図面を在て在ゆ名うり
中る蟻の蛙行如くよを携て来りし小人治の一族
なるくけ小台城東浦寨玉遍盈維榜葛刺崑崙層斯
これゲ小ゆ八名も吟沢容も知くぬ人間八地の六大列を
振ゲし閻浮提の上泥利の底まて小位ゲん程ごの
人間八のうゲ出て小集りうり如日本の人見ゆる
さくゆる服も彷彿うて二ッて八ゆうざるに今
寅小舎合ヤ一八世界小祖ゆる玉小ゆる人也

懐所で見こうる蓬麻と男性女西國で見る戸形絵男も
あの所の者て化りひしひしかしたる顔一同黒人なるど
異形異形の見せ物と一文も出さびしして一日見る八安物と
されども西の脈まて八見るか嫌うて完やと所も消しあへぬ
さも内ふ東方遼強しし獲しして生を見れば蒼蘿々
そして荷るげてて〳〵あの来る音浮沈そして大水境高さ
げて〳〵又吐とふ怎麼人間来るゆんと胸と見てあまだ
人ふ八あ〳〵で茅玉の茅木し生人一番ふ所穂と出る苟茅
生の大幟を押えさせ口芸藁の甲ふ荒縄綴の蒲筍塗を
悉霞と腹稈拘造りの稽乃古刀ふ義茅の竹刺さげ
仙蓬思ふ程乃雲後脇鉾る吳義信てゆ〳〵と茅案

山子の弓矢を授て皆一様ふ出立しし八見やみ穀の穀ま
茅玉乃茅茅玉の稲早稲八先陳中稲仲軍遅稲八好陳
吳法尾法後法と〳〵弁尾の責鼓をポンポンと打ち
〳〵賢候乃持楯を宗い揺ふ揺ちく〳〵ばうこうづ〳〵ちうこう
遠ふ乃の姫を原八麦大豆を小豆を蕎麦菜蓼稈胡麻荘
茅持廻祇数百万被ふ寄ふ茶海狭〳〵と漕茅べてで形く
乃ふ方を原バ茅玉乃茅木ともこ中ふ狩れて泰山を
五六百ともこる如く東北の方ふ蟠屈してえこる桃木あり
こも枝鬼門ふ達るの三ふ星茶与鬱塁の二王宮ふ居て
八ふ住の鬼ふ下智して十二の造物ども働しむは桃
木と麦大将ともして茅木枝を交へ茅を連れ翠ふ映し

黄帝ハ輝千羽と号ケの別あり龍を用ひてお角ハ獣とあ
ゆ帝ハ玉の獣ハ熊大将ハ麒麟大王獅子王虎王熊王と軍
の帥とす　猩ハ猪乃麦獣馬ハ猴乃麦獣鹿ハ角大角
の口笛吹て角ハ来れりを知ハ大鵬王九万里の鳥大将として
公雀鳳凰鶴集ハ口ハ及ル一文笛とふくら雀声を自慢の
鶯ハいくらまて咲喰石ハて成ハ色ハ次ハ海ハ
乃底津波と知しめ八部乃龍神若もこの伯も入れ乱ハ
沸乃阿とも鱗の除り集れハ雑魚も流石ハ魚まし
て鯖振ハ来ハ来れバ悪ハ来甲ハ去甲ハ来ハ
国戦爺の二の口ハ迫ハ弟ハ鳴ハ虫
ハ上山の行人蛭松乃人乃百足を始ハ蛍夜話ハ

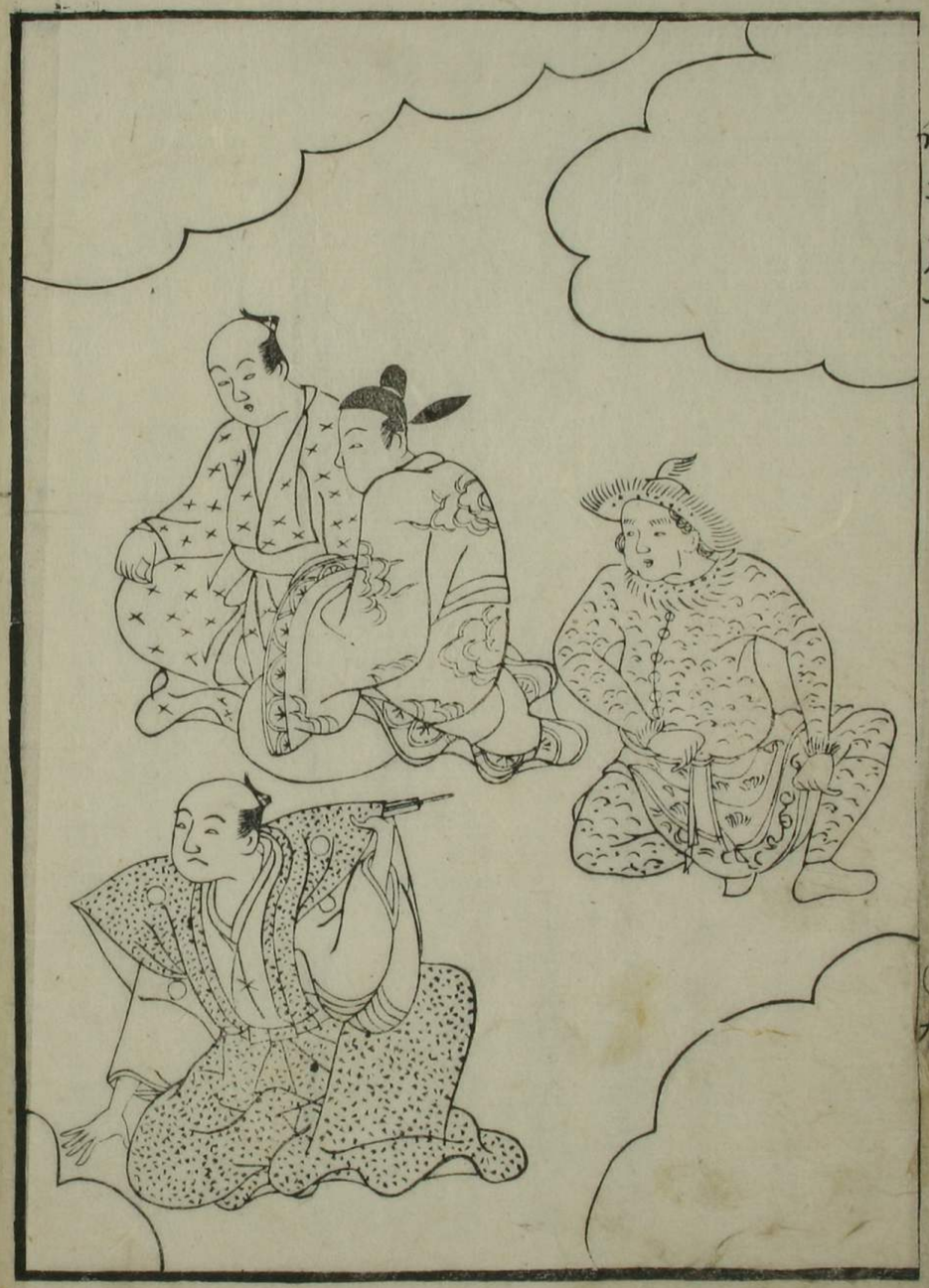
あるあるゆるむしの除り八蟻塚ハいるる所て蠢ハ
て蚊行ハ乃ハ梅又冬ハ乃益貝ハ王侯の履冠笠法楽器を
先ハ軍器の属武具の故農耕具工匠具ハ玩弄乃
乃具家財乃新具流て世界の古物店ハ古物店十軒店
故莫所故物ハ脇ハれバいるる上ハ乃古識学古
乃用利ハ知ハ連塚の玉ハ月読ハ星ハ見る
乃新ハ織布ハ所謂古今染ハ大将ハて紙子紗
猿編編論子羽二重ハ清ハ天鵞絨毛紗毛皮ハ南
蛮織ハ少別ハ衣服乃業女子供の持物ハ針箱に
年を経し扶屑の一業ハ武まて底拂ハ集乃お
いよ〳〵松乾果切粉の新物を素毛象世界の底を

振て人乃こと〻お對し来るを別て深セ〻ハ心し〻く
人乃こと〻茅拓こと大喧嘩乃始りなり〻ん茅見が支り
なり〻バ我身ハ〻ぐたり〻くきて未法末世ハけれ合セ彩淡
なるし机欲よさくあるものよりそ〻くまハけまもひ怠慢
なるものじやとあるハ大屋ゞ始よ流つゝ慄々ぬ〻くひ
くしハ可笑も又記し

人間こと茅物こと位を論事

道ハ人ゝを迫沫嗤を者〻くあ〻ん赤よ麻上下よ大小挾込合贅
の判元年代頃ものに十七歳乃由良ら卿を殺さなり〻むりし乃
沢村も十郎なるも労まじ机侍ものこと人名小大見の踪ものこと歩
つく茅拓方小ゝ向ひ面倒の〻ハ中〻威儀蕩ものこと注し

振ら形て茅拓勢の中よりも玉藻のこと仮茅天皇
茅拓を押分〻〻動小進出ら侍こと對座ものあを
始ら〻譚を初〻め人乃ハ見ものこと支の始こと行を論ぜるも
中〻こと耳を嘲して吟振ら彼侍衣服を敬閑仮茅天皇に
謂て曰人の名を問ハ必我名を名告こと中〻こと拙こと
大日本和列こ梅の邪こと仮しまゝ大食冠釜不足ら
十こ屋の後流粥腸稲穂乃字が家来こと支退位法〻卿
こる盛こと中去〻ぐ〻今日ハ世衆小謂ものこと教茅拓人乃
こと上下位を論議しひ負〻こる方こと設〻下よ附稲〻こる方
こと上こと中〻こと位まよ〻く舎人こと称る法し〻ら今位を
設〻論弁〻こと〻人乃ハ貴拓ゆく茅拓の上流こと



宮う切さうのでござるされども又何とう論じ分のしや
一通り彼りうん分不肖かぐ世界中の為代よれ迷云
仕ん一通り作わをゆうんとひられば仮令天を歩て
曰古昔より人と為ものも貴しいふ人間中るといひ
仰く朱しまて人ろハ然おりうくあれども大なる法ろう
天地位を定為ものは中小在く咸天地小事繋為食獣と
いくも土ようせじて古小死さて元天小事ろの法ありう
絶小人ろ私を用て我くぶ天命を畏ひ火とをて滅を烈
し猛小遠ろ刈作し臣小春水小炎しさもくしかためて
元をいく命と物ア為ものと撓撓自由自在小ものは小ものを
人間の貴さ不ろ為ものと見下せどもこそそしいふ人ろ

も命ろ考しハ仁をのれくそ生ひ貴しいたんさ命を畏ひ貴
かるもろ根なハみ穀ろり為ものも又人ろを助ハ元も又穀小新
し絶ハ元先一番小貴物ハ為ものあくゆる今日ようう為ものを上
と形し人ろとをとるべくしそ為又遠背ろさうんやは迷云
あれば生ようものと上ろものを人ろとをとるべくし義く
いくふと向うけりうる感元を吟て稈稗の歯小著てく
齒内ろ為て曰凡為物命と天小稟ろう元を性とをとを性
ありて雖性を全すべきろるものハ禽獸ろん天地り
陰陽ありう陽小情と性と二ツあり白虎通小不滑性を
陽の施情ハ陰の化ろとしくうを情と性と二りろ全く
ばろ去ハ人間ろ本石の軌ハ性ハあれども情ろ禽獸魚虫

乃ち人は情あれども性を換ずして人は禽獣と異なる所以
あるゝもこゝに人の中りてこゝに天性の性と
いふあを換ざるを〻いふ人も獣の性を換ざるをあく
これ二つあり〻天命を全く備へ
猶きゝ者はその二つを兼備へ三綱五常君臣父子夫婦を
定めこゝに記して法兄弟族人朋友を別爵位を極
て淳厚礼法をとりつゝ上を敬ひ仁をとりて下を撫孝弟忠
信をとりつゝこゝに人の中にてたゞ〻君を敬ひ上下自定
民は君に支へる事礼をとりて〻夫は父母に孝を敬て
〻婦は夫に支へる貞をとりてこゝに稟性しる天の命
を全く行ふ所一の者ふ〻〻者あるも貴きもの沈授し

禽獣は乳ちをあふ親子兄弟の別もなく君臣の定めもなれば虫は虫を
食ひ魚は魚を食ひ獣は獣を咬ひ互に属を害して
ひ孤ぜ兄天命を全ひ天地の系統を和育し日月代補
ゆふを似さるこゝを沈〻天地の性人を沈〻貴とこゝろ
天地の与人合を兄亜〻仁をとる事〻仕〻人生来彩色
第一番悉人をとゝめ人生〻る物〻神農は天の
時地の利を分別系統を制〻氏小農化を教へ燧人氏は木燧
を燃〻火を以て氏小熟食をこゝろを教へ我邦にも天照
大神は穀乃種をとりつゝ始て天の狭田及び長田小植ゆひ
大巳貴命寺而穀耕農をなし〻人の別指示ふ氏神祀列〻稲
大の神を〻上古〻〻邦のこゝ人〻〻あ小は使〻〻あり

宮ゐる家柏を崇め今日政くに人ゐの上ふるゝや芸元の親族
方も人ゐがあれバ人も来ると名を付てそれ〳〵の用ふを
て使ふてゆく人ゐが用ひぞバ不ハ貴く麦賤く檜ハ杉木楠ハ敬木
とゆゑ人ゐてその功能と邪さんやあ者の功能を上て人ゐら用ひ
ぞんバ家柏も感有而可宮而可の柏し故ふ長澤連ゞ安宅論
小白八年呑牛吐者あり是を中庸扁論ふ不毒不菜者あり是を
屁の中蒸とゆふとゆゑを宮をゆゑ家物乃天命と今ふまゝそ
人ゐふ者ゐゐ有と知りぬ〳〵使しゝ又世を祝ゝ人ゐよりも貴し
とゆふ世投ゞゝござゝふゆゝんと向ゐけら生仮米を穿擦ゞ
世心糠ふ擦ゐる和を淳も禮米を稗米を稗よをしてで長ゐ

心之鬼第一終